

敵をも愛する愛

今日学ぶマタイ5：43～48は、敵をも愛するキリスト者の愛を教える有名な箇所である。ここでも主が指摘しておられるのは、律法学者やファリサイ人らによる律法の誤った解釈である。問題は「汝の隣人を愛せよ」という言葉に続く「敵を憎んでいい」という付けたしの教えにあった。イスラエルの民は、神の選びの民として、隣人を自分のごとく愛さなければならない、と強く教えられていた（レビ19：17～18）。しかし、この戒めは、彼らの選民意識の変化と共に、次第にその本来の意味が変えられていった。

異邦人という言葉がある。ユダヤ人から見て他の民族に属する人々を指す言葉である。しかしこの言葉は、彼らの選民意識の変化と共に、次第に差別用語に変わって行った。自分たちこそは神によって選ばれた特別の民であり、神の契約と律法が与えられ、契約のしるしとして割礼を受けているという誇りが次第に傲慢になり、他の民族を「異邦人」と呼んで軽蔑するようになった。彼らにとっては、異邦人は宗教的に汚れた民であり、「隣人」の中には入らない、嫌悪と憎しみの対象であり、敵でしかなかった。

こうして彼らの宗教的偏見によって、この「汝の隣り人を愛せよ」という神のオキテは、歪曲されて理解されるようになった。この戒めの中の「隣り人」とは、選民仲間のことで異邦人は含まれず、従って、同じ同胞さえ愛しておればそれでよく、自分たちはこの律法を完全に守っている、万事はオーケーであると思うようになったのである。

それに対して主は、そうではない！この戒めの中の「隣人」とは、同胞だけを指すのではなく、異邦人をも含むのであって、彼らもまたあなたの隣人として愛し受け入れなければならない、と言われ、そして神の無限の愛、無償の愛、へと人々の心を向けて行くのである（45節）。

ここにはキリスト教倫理の核心が教えられている。それは、徹底した「愛の倫理」である。しかも敵をも愛し、迫害する者のためにも祈る、という愛の倫理である。そのような愛は、アダムから受け継いできた古い罪の人間性からは決して出て来ない愛である。十字架から滲み出てくる神の愛である。

私たちが、人々から不当な仕打ちを受け、恨まれ、叩かれ、罵られとき、本来の私たちであればすぐ、やられたらやり返せと反発する。しかしまさにその時に、聖霊なる神は私たちに祈りへと導かれる。そして十字架のキリストを見上げさせる。「なにおお！」と反発する私たちの心にキリストがお入りになられ、私たちの心を和らげ、私たちの心に愛を増し加えて下さる。

英国の学者バークレーが適切に語るように、誰かのために祈りながら、その人を憎むということはできない。自分のために祈り、また、憎みたいと思う人のためにも祈るとき、我々のうちに変化が起る。我々は、神の前で人を憎み続けることはできない。憎しみを取り除く最も確実な方法は、憎みたくなるその人のために祈ることである。名言だと思う。

「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられた方は、自ら、その十字架の上で、敵対する者のために「父よ、彼らを許し給え」と祈られた方であることを覚えよう。そして、私たちも、隣人のため、敵対する者のためにも、キリストの愛をもって生き、キリストの愛をもって祈ることの出来る者になりたいと思う。